



インタビュー

企業が自力で学習を継続できる指導により 互いに共進化社会の実現へ向けた道のりを歩む

大野II(株)統合共育研究所 CEO 大野雅之氏
吉川II(株)統合共育研究所 CEM 吉川宗男氏 聞き手IIブレインワークス

外部からビジネス視点で学校教育を改革

— まずは統合共育研究所の設立経緯をお教えください。

大野 私は20年ほど学校教育の分野に携わっていた経験があり、当時所属していた団体で21世紀に向けて「人が幸せになる」ことを目的とした長期計画の教育プロジェクトが発足しました。これは学校や地域など限られた場所ではなく、地球規模で教育に対する考え方を見直そうというもので、内容的にも大変素晴らしい構想です。

しかし、当時の学校教育には新しい思想を受け入れづらい保守的な体制が根付いており、プロジェクトは暗礁に乗り上げました。そこで、教育界内部からの変革に限界を感じた私は2005年に独立し、今度は外部からビジネス視点でアプローチしようと考えたわけです。

— 外部からの方が改革を行いやすいと感じたのですね。

大野 内部からのアプローチでは、たとえ一つの学校で成功を収めてもノウハウの囲い込みが発生し、他校に広がっていきません。ビジネスの舞台で誰もが納得する素晴らしい内容のプログラムを構築し、世の中から評価を得て学校教育に戻す、これが最良の選択だと思います。

学習者と指導者が共に育つ「共育」を実践

— 会社名に含まれている「共育」という文字にもこだわりがあるそうですね？

大野 設立当時は「共育」の文字を見る機会が少なかったのですが、最近ではかなり世の中に普及してきましたね。「教える」という言葉はどうしても上から見下ろすようなイメージを抱くのに対し、私たちは「人は自ら変わることはできるが、人を無理やり変えることはできない」という基本哲学を持って取り組んでいます。これは学習者に対して指導者が無理やり教えるのではなく、まずは個人の学習意欲を盛り上げてから必要な知識やスキルが身につくよう支援す



(株)統合共育研究所
代表取締役CEO
大野雅之氏(左)
取締役CEM
吉川宗男氏(右)



る、という考え方です。

また、子育て時には親が子供から多くのことを教わるように、メンタリングでもメンティーだけでなく支援したメンターが人間的に大きく成長します。こうした点から「教える育てる」ではなく「共に育つ」という意味を込めて「共育」と呼んでいるわけです。

人間力の向上と社会構造の変革でつかむ本当の幸せ

——「人間力」とはどのようなものでしょうか？

吉川 人間には、知識やスキルを得る頭のインテリジェンス「知力（IQ）」以外に、感性・感情をつかさどる心のインテリジェンス「感力（EQ）」、行動力や身体に染みつく能力を意味する身体のインテリジェンス「行力（BQ）」があります。そしてこれらを統合的に結びつけ、

何かをやり遂げる生命エネルギーの源となるのが「活力（SQ）」です。

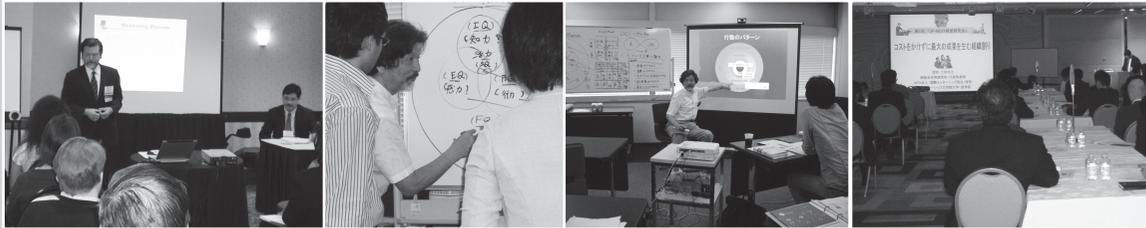
しかし、これら4つの力が揃っても土台となる環境が悪ければ、能力をフルに発揮することはできません。そこで職場や家庭、社会全体など人間が置かれるシチュエーションを場の力「場力（FQ）」と位置付け、この土台を含む5つの力の集合体を人間力と定義しています。

人と土台を一緒に考えるというのは珍しいですね。

吉川 いくら優れたコンテンツでも、前後関係を示すコンテキストがなければ伝える効果が半減以下になると一緒に、人間力の向上にも環境が大きく影響してきます。ちなみに、場力には物理的な生活環境だけでなく、緊張感やプレッシャー、雰囲気など目に見えないものも含まれています。本来の意味で人の幸せを作り出すには人間力の向上が不可欠であり、人間力の向上には人々が過ごす環境、社会全体を改善する必要があります。そこで、私たちは個人の能力を高めるだけでなく、社会構造を変えるような取り組みを実施しているのです。

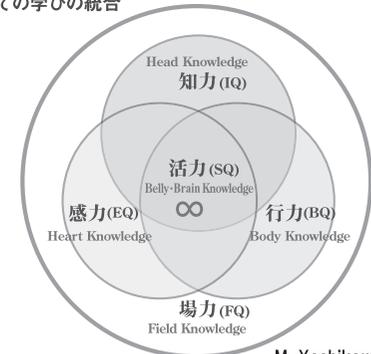
——それは具体的にどのようなものでしょうか？

吉川 例えば、メンタリングを導入した企業が自力で学習を継続できるように指導している点が挙げられます。ビジネスとして利益を優先すれば、当然ながら契約更新などで困り込んだ方が得策でしょう。しかし、各企業が私たちの考え方やビジョンに賛同・実践してくれば、それだけで共進化社会の実現に向けて一歩ずつ前進していけるのです。こうした意味でも他社の教育ビジネスと切り口が全く違うので、実質的な競合はないと思っています。





「全人格的人間力パラダイム図」
 HQ (Knowledge/ Intelligence for Humanity)
 全ての学びの統合



M. Yoshikawa Model

人間が本来持つ力を5つに分類した「人間力」のパラダイム図

地球規模での教育改革を行うには、協力体制が必須というわけですね。

吉川 まさにその通りで、人間力の向上と社会構造の変革にはいずれも相互支援的な考え方が求められます。そしてシナジー効果でお互いを高め合い、人間にプラスとなる無限ループを繰り返す「メビウス理論」こそが、共進化社会につながる早道なのです。

2020年、共進化社会の基盤完成を目指して

— 今後の目標についてお聞かせください。

大野 あくまでも数値化できる一つの指標ですが、現在は日本だけで年間3万5000人ほどの自殺者が出ています。メンタリングは知識やスキルの習得支援と同時にメンタルケアを行うので、自殺者数も大幅に減らすことができます。

— その辺りが一般的な教育と大きく異なる部分ですね。

大野 はい。現在では着々と有資格メンターが増加しており、メンターが増えるほど一般の人々が出会う機会や1人当たりの支援時間も増えます。1人のメンターが年間に約100人と出会うと仮定し、現在の人口が減る確率と照らし合わせると、2020年までに100万人のメンターを育成すれば、自殺者数を可能な限りゼロに近づけることができるわけです。

— まさに「人を幸せにする学問」を象徴する素晴らしい取り組みです。

大野 そのほかにも、人を幸せにする構想は数多くあります。統合の哲学を確立し、学問として体系付けて社会で実践していく。私たちはこれらをすべてセットで考えているため、将来的には統合共育の関連情報を集約した「統合共育ライブラリー」、統合の哲学を体感して本当の幸せが得られる「アミューズメントパーク」「統合ランド」、さらには統合をベースとした企業や団体が集まる「ToGoTower」などの建設も視野に入れていきます。

— 統合の哲学を世に広める、実に壮大なビジョンですね。

大野 これらの構想を話すと、スケールが大きすぎて夢物語だと笑われることもあります。しかし、私たちはその夢物語を現実にするため日々の業務に取り組んでおり、歩みは遅くとも着実に進んでいます。2020年には、人々が共に支援し合い進化していく共進化社会のベースが完成するでしょう。

— 共進化社会の実現に期待しています。ありがとうございました。